



海外出張とツアー

今年は海外出張やツアーに恵まれた年であります。海外と言いましてもほとんどがヨーロッパです。他国の人と働くことはとても興味深いものがあります。ロンドンで働いていても、多国籍人と働く機会は多くありますが、やはりその国に行ったら、その国のやり方に従うのが普通のようなのです。

先日は、ニューヨークで照明をやらせていただく機会をいただきました。去年、私が照明デザインをさせていただいた演劇が、ニューヨークのオフ・ブロードウェイ・ブリッツフェスティバルに招待されたのです。アメリカのシアター労働組合は労働条件がしっかり取り仕切られていて、部署ごとの仕事の振り分けがしっかりされていると、前から耳にしていたので、それを心得た上でNYに向かいました。「きっと、デザイナーは卓にも触らせてもらえないのだろうな…。特に今回の公演は細かい調整・変更がたくさん必要な演目だから、自分で卓を打ち込んだ方が手取り早くいいのだが(テクニカル・リハーサルも短いし…)。」

シアターはチームワーク。照明デザイナーは、欲しい明かりをチーフにうまく

伝えて、その理想の明かりを実現してもらうのがデザイナーであり、それがデザイナーの役目、という方がほとんどのかもしれませんが、そうもいかない状況もあるのは、皆様ご存知のことと思います。

ニューヨークではじめての仕事だったので、期待と緊張の中、59E59劇場に向かいました。到着すると、とっても綺麗に、極正確に灯体が吊り込みされていて、感激しました。込み入ったプラクティカル(ストリートランプやスモークマシンなど、電気や照明が必要なセットの一部)の仕込みも、フォーカスもスイスイ可憐な手捌きで、文句一つなしに仕上げていただきました。劇場スタッフは(フリーランサーも含め)とてもスマートで、仕事が丁寧で早く、スーパーマンの集まりのようでした。私が脚立に登っても、卓に触っても、カラーを切っても、嫌な顔一つせず、「お手伝いできることがあったら、何でも言ってください。」とってくれるのです。

イギリスやドイツのあるスタジオ／劇場で同じような作業をしていたとき、「僕の仕事を取らないでください。僕ら

を信用していないのですか?」と言われてたことを思い出しました。私も彼らと同じ立場になったことが何度もあるので、彼らの言い分はよくわかります。彼らは自分の仕事に、誇りとプライドをもって働いているのですから、それをリスペクトしなくてははいけません。きっとユニオン精神の強い、他のニューヨークの劇場に行っていたら、同じことを言われたかもしれません…。とにかく、ドリームチーム(劇場スタッフ)に恵まれたお陰で、公演は成功することができました。

話はドイツに移りますが、先々月は、ドイツ(フランクフルト)のプロライティング&サウンド展示会にて、岡山さんの視察のお供をさせていただきました。巨大な展示ホールに敷き詰められた照明の数々に、目が眩みそうでしたが、とても見ごたえのある展示会でした。見に来ているお客さんたちと交流し、情報交換ができたのはとても貴重でした。展示会の全体の印象としては、イギリスのPLASAやABTTの展示会と比べ、圧倒的に規模が大きく、デモンストレーションをショースタイルにして、とても力を入れてお客さんを引き寄せていました。活気のある市場のようです。LEDの商品がとっても多く、そのいくつかの商品はLEDとは思えないくらい綺麗なエッジとフェードでした。しかし、この間イギリスのさまざまな劇場を視察したときに劇場スタッフから言われたのは、「今まで使っていた一般照明をすべてLEDに変えられるお金はまだないし、後10年かかるかもしれない。」とっておりました。今後、これらのLED商品がお手頃な値段で買えるようになれば、ディマー数の少ない劇場や野外劇場照明にも革命が起きることでしょう。

